

週 報

「信じます。

不信仰なわたしを、
お助けください」。

(マルコによる福音書第9章24節)



人と神、人と人をつなぐ難しい働きをしています
日本基督教団 西宮公会教会

〒662-0834

兵庫県西宮市南昭和町 10-22

TEL 0798-67-4691

FAX 0798-63-4044

郵便振替 01170-3-4901

ホームページアドレス

<http://www.koudou.jp/>

電子メールアドレス

koudou@gamma.ocn.ne.jp

小さな手大きな手

(前週よりのつづき)

「ローマ・ゲット」のことで始まり、ヴェネツィアのゲット、そしてユダヤ人との日常的な出会いが、底流となっているのが「地図のない道」です。須賀敦子の、ミラノ・コルシア書房で出会った「マッチオとルチッラのどちらも、血統のうえではユダヤ人だった」マッチオたちが、ナチから逃れた、スイス国境の山の町で、そのナチに更に追われた時助けた町の神父は後に、「ドイツ軍に射殺」されていたことを知ります。そんなユダヤ人の歩み、歴史の間近にいたとしても、それを「書く」ことはたやすくはありません。須賀敦子は、それを読めるように書ける文章・文体の人だったのです。後半は、ヴェネツィアです。同じように、そもそもが書くことの難しいゲットの事ですが、だからと言ってヴェネツィアではそれを避けて通ることはできません。同じように、そこで道を歩く限りは避けて通れないのが「コルティジャーネ」《高級娼婦》です。避けて歩き、避けて書くこともできますが、できてしまって「接点」を、自分と、自分の文章・文体で生きてしまうのが須賀敦子だと思えるし、それが「地図のない道」です。

そのユダヤ人の現在、パレスチナとイスラエル国家についての、もう一つの報告が「パレスチナ実験場」(アントニー・ローウェンステイン、河野純治訳、岩波書店)です。2025年1月1日の、新年礼拝のプログラムで紹介した10冊の本の中に「ホロコーストからガザへ／パレスチナ政治経済学」(サラ・ロイ、青土社)がありました。新たな10冊「パレスチナ実験場」の、日本語訳への序文は「20年以上にわたってイスラエルとパレスチナ情勢を報道してきた私にとって、2023年10月7日の出来事とその後に起きていることは著しく衝撃的である。毎日のようにガザで殺されたパレスチナ人の写真や映像が目に飛び込んでくるが、その遺体は引き裂かれ、脳は吹き飛ばされている。6万人をはるかに超えるパレスチナ人が、イスラエルによって殺され続けているのが。これは、ユダヤ人

の名の下——つまり私の名の下に、——実行されている」と書かれています。「…これは、ユダヤ人の名の下に——つまり私の名の下に——実行されている」の「つまり私の名の下に」には、「その遺体は引き裂かれ、脳は吹き飛ばされている」イスラエル製の武器に、日本も関心を持つことで支援しているという意味で、「つまり私の名の下に」には日本・日本人も含まれるのです。

それらの事を、具体的な事実として報告しているのが「パレスチナ実験場」です。

「小さな神のいるところ」(梨木果歩、毎日新聞出版)は、毎日新聞日曜版を引き継いで、サンデー毎日に連載されている評論のまとめの一冊です。梨木果歩との出会いは古く、「飛ぶ教室」で登場した「西の魔女が死んだ」です。「西の魔女が死んだ」は、今でも時々、というかしょっちゅう作っているジャム作りの時に話題になります。今日も(12月23日にも)何人かで集まって、カリンのジャムを作っている時の、砂糖の分量の事で話題になります。りんご、八朔、カリンなどのジャムを作りますが、砂糖の量は、とてもいいかげんです。自分でも、入れすぎかなと思うくらい、一袋をざっと入れてしまいますが、「そう言えば、『西の魔女が死んだ』の、まいと魔女・おばあちゃんが、ジャム作りの時」、まいが「砂糖そんなに入れていいの」と言うと、魔女・おばあちゃんは「…ジャムを食べる量は知れているから…」と答えたが、よみがえってくるのです。で、まあ、結構砂糖を入れてしまうのです。

「小さな神のいるところ」は、それを「ここだ!!」と明示はしませんが、全体として、その「ところ」はあるのです。

「…東京で私の住む地域に圧倒的に多いのはヤブミョウガだし、八ヶ岳ではマルバダケブキ。そういうものが木陰で群生をつくり、その上に木漏れ日がさしているのを見ると、荘厳な気持ちになる。そういう小さな神様たちを守ろうとする応援団(出版社や書店を含む)が出てくるのも頷ける」。

(次週につづく)